研究プロジェクト

負の感情研究――怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

人間の「こころ」のはたらきの中で特に大きな影響を及ぼすのが「負」の感情である。「負」の感情には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、それをコントロールすることは容易ではなく、「攻撃」に代表される社会的行動の最も強力な「動機」となり得るとされてきた。本研究では、これまで「負」とされてきた感情を、「正」の感情との相補的な関係や可換性を手がかりに、同時代の諸社会における参与観察とさまざまな時代の文献解釈を往還しつつ分析してゆく。

■2011年度の研究活動

2011年度はワザ学と共同して２回の研究会を行った。2011年５月16日、第４回研究会（ワザ学研究プロジェクトと共同開催）。同年11月24日、第５回研究会（ワザ学・こころ観研究プロジェクトと共同開催）。

■二つの自然災害によせて

東日本大震災の被災地調査は、鎌田東二『現代神道論――霊性と生態智の研究』春秋社、2011年11月刊にまとめた。

天河大辨財天社：2011年９月４日、奈良県山間部を集中豪雨が襲った。天ノ川―十津川―熊野川水系に160カ所以上の土砂崩れが起きた。土砂ダム・せき止め湖が作られ、逆流や滞留が起こり、増水により大被害が発生した。天川村の隣の大塔村は土砂崩れで幹線道路が分断され、陸の孤島になった。天河大辨財天社は社務所と参集殿が床上浸水。坪ノ内地区では３カ所で土砂崩れが起き、大洪水をもたらした。北から南に流れる天ノ川本流の濁流と、東から西に流れる支流の坪ノ内川を伴う奔流と、南での大規模な土砂崩れによってできた一時的な天然ダムがもたらす逆流の３つが、禊殿の前あたりの合流地点でぶつかり、30m以上の水柱となって山の尾根を越えるほどに高くなり、それが何波にもわたって坪ノ内の集落に押し寄せた。柿坂神酒之祐宮司は、「こんなに大きな被害は有史以来初めてだ」と何度も繰り返した。

■能「鵺（ぬえ）」にみる負の感情

「諸国一見の僧」（ワキ）が芦屋の浜辺に至り、夜ごとに幽霊の出る堂に泊まるはめとなった。その堂にいると、鵺の「霊」（シテ）がうつほ舟に乗って現れる。僧は怪しく思って正体を尋ねると、鵺の霊は、「葦の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり」（『伊勢物語』87段）の歌を謡いながら、僧の「法の力」で自分の「心の闇」を弔ってほしいと依頼し、ついに自分は近衛天皇の世に源頼政に退治された鵺であると明かす。鵺は退治されたときの無念の様子を物語り、僧に弔いを頼み、「月日も見えず暗きより、暗き道にぞ入りにける。はるかに照らせ山の端の、はるかに照らせ、山の端の月と共に……」と謡いつつ、夜の海の波間に消えてゆく。「心の闇」を持ち「暗き道」に入った鵺に、山の端の月は静かな光を照らし出す。

世阿弥が「鵺」を書いたのは応永23年（1416）頃である。「鵺」の最後の謡、「月日も見えず暗きより……」は、和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべき　遥かに照らせ山の端の月」（『拾遺集』）から採ったものだが、「暗きより、暗き道に入」る自分の姿を予見し、それを「鵺」と重ね合わせたのだろう。そして、和泉式部の歌のように、煩悩の吹き荒れる「心の闇」の中で懊悩する自分を仏法の真如の月によって照らし出し救ってほしいと願ったのである。ある伝承では、和泉式部はこの歌を作ることによって成仏したとするが、世阿弥もまた「鵺」によって「成仏」することを願ったのかもしれない。世阿弥は能という新しい芸能の創作によって、荒ぶるうち捨てられし神々や人々の「心の闇」を浄化しようと企図したのではないか。

■心理療法と瞑想で向き合う負の感情

2011年７月28日、濱野清志京都文教大学教授、永澤哲同大学准教授を発表者に迎え、ふだん分けて考えられることが多い心と身体は同じいのちが別々の現れをしているにすぎない、という心身一如の東洋的視点から、「気」をキーワードに心理臨床活動を考察した。

■研究会の記録

2011年７月24日、坂本清治氏発表「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」より。

――私が抱えている怒りやねたみといった負の感情、子どもたちが抱えているもの、それを認めて初めて次のステージがあるはずなのに、いまの学校の現場はその存在すら認めない。よく問題を起こす子がいる。悪い子ではないが、自分で考えない、決めない。「自分で考えても、どうせそうさせてはもらえないから、考える意味がないじゃないか」とふてくされる。親がずっとそういうふうに関わってきた。そんなやりとりをずっと繰り返していてふびんだった。そのとき、私は泣きながら、彼を大声で怒鳴りつけ、叩いた。いま14人の小中学生がいるが、周りでみな聞いているし、見ている。

■今後の課題

①感情の移り変わりの「あわい」に関する質的研究の深化、②負の感情に関する通文化的アプローチの模索、③災害をめぐる今昔の負の感情調査、この３つが今後の課題である。